

*The Rainbow*における“anthropological turn”

ゴシック、異教、Bildungsroman

古城輝樹

序論

D. H. Lawrence の *The Rainbow* (1915) は、19 世紀末から 20 世紀初頭のイギリス農村を舞台に、Brangwen 家三代にわたる歴史を描いた長編小説である。なかでも、三代目 Ursula Brangwen の成長は、近代社会に生きる個人の成熟という枠組みを超えて、土着性や宗教的伝統、帝国主義といった外部環境との関係のうちで形作られている。

これまで Ursula の成長は近代的な Bildungsroman として論じられることが多かった (Connell, Iwai)。Lawrence 自身がいわゆる「炭素の手紙」で示した ‘another ego’ (Letters 183) という概念は、Ursula が他者との関係に依存しない自律した自己を目指す過程を理解するうえで重要な視座を提供してきた (Alden 115)。しかし、*The Rainbow* における Ursula の成長は、帝国主義のうちの土着性という、Jed Esty が 1930 年代以降に生じたとする ‘anthropological turn’ を先取りした方法で描写され、外部の環境と不可分である。

以上を踏まえ、本発表では、Ursula の成長を帝国主義的構造と Brangwen 家の血縁的土着性という二重の抑圧を乗り越える過程として捉え、そこで重要な役割を果たす Lawrence 特有の異教的宗教性に注目する。これは、土地や身体に根差し、正統的なキリスト教的枠組みを逸脱した宗教観であり、Ursula の成長を支える新たな精神的基盤となる。その上で、Ursula の成長を阻害する要因とその克服過程を異教的宗教性という視点を通じて明らかにすることを試みる。

第 1 節：Ursula の成長を阻害する帝国主義と Brangwen 家の伝統

Ursula の成長を阻害する大きな要因の一つが、恋人 Anton Skrebensky の存在である。Anton はポーランド系移民の背景を持ちながら、大英帝国の軍人という立場を選び、‘What did a man matter, personally? He was just a brick in the whole great social fabric, the nation, the modern humanity’ (304) と述べるなど、個を国家の一部としてしか捉えない人物である。個人よりも全体が優先されるという彼の思想は、Ursula が目指す個の確立とは対極に位置する。

確かに Ursula は当初、Anton に閉鎖的な Brangwen 家の共同体から脱出するための希望を見出していた。Brangwen 家の女性たちは、土地に根ざした母としての役割を担い、個としての欲望や主体性を抑圧されることで共同体に組み込まれてきた。Ursula はこの伝統に違和感を抱き、‘How to become oneself, how to know the question and the answer of oneself’ (264) と自問し続ける。Anton との関係はそのような Brangwen 家の伝統から解放され、個として生きるための道と信じられていた。しかし、Anton 自身が体現する価値観は、実は Brangwen 家の血縁共同体と根底で共鳴している。血と土地によって支えられた Brangwen 家の価値観が、Anton においては国家への従属という形に置き換えられているに過ぎないのである。Anton は Ursula に対し ‘It doesn’t matter [...] if you are Mrs. Skrebensky, the B.A. is meaningless’ (439) と断じ、彼女が教育を通じて得ようとする知的自立そのものを否定する。Ursula は Brangwen 家の土地的共同体から逃れようとしながら、Anton との関係を通じて帝国主義という別の全体に回収されそうになるのである。

Ursula が教師という職業を選択する点にも、この二重構造は表れている。教育は個の成長を促す営みである一方で、帝国主義的価値観を再生産する場でもある。Ursula は教師として、子どもたちの個性を尊重しようとするが、次第に ‘to bring the will of the children into accordance with his [teacher’s] own will’ (356) という管理的教育観に絡め取られていく。教師としての役割を果たすことは、国家の支配構造を内面化し、それを再生産する立場に自らを位置付けることでもあった。

このように Ursula は、土地への血の親密性に支えられた Brangwen 家の共同体からの脱出を目指すものの、最終的には帝国主義的な支配構造に巻き込まれることで、個としての成長が阻害されている。土地、血縁、国家という複層的な抑圧構造の中で、Ursula の存在は大きく揺さぶられるのである。

第 2 節：異教的ゴシック建築と Ursula の成長の可能性

Ursula が Brangwen 家の血縁的共同体と Anton を通じて象徴される帝国主義的価値観という二重の抑圧を受けながらも、新たな成長の可能性に目覚める契機が、物語終盤に示される虹のイメージである。‘[T]he rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit’ (458) と描かれる虹は、土地・身体・精神が新たに結び直される未来を象徴する。それは Brangwen 家の血の共同体や、帝国主義的全体性とは異なる、身体的かつ宗教的な新しい秩序の兆しとして提示される。

この新しい秩序を物質的に示すものが、作中で何度も描かれるゴシック建築である。Lincoln Cathedral の場面が

代表的で、‘Spanned round with the rainbow, the jewelled gloom folded music upon silence, light upon darkness, fecundity upon death’ (187) と、光と闇、生と死、音と沈黙が絡み合う生命の循環そのものが、虹に喩えられる建築空間に刻み込まれている。ここで描かれるゴシック建築は、単なる宗教施設ではなく、土地と身体、そして生命力が交差する場として、Ursula の身体感覚に深く刻み込まれた。そもそも Ursula 自身 ‘I think it’s right, to make love in a cathedral’ (276) と述べており、身体的な愛と宗教的空間が親密に結びつく感覚を持っている。ゴシック建築の描写が示すのは、T. R. Wright が指摘するように、精神と身体を分離し身体を抑圧してきたキリスト教的二元論とは異なる Lawrence 特有の異教的宗教性にほかならない (85)。身体、土地、宗教が直接的に結びつくこの感覚は、Ursula が帝国主義や血縁の共同体という抑圧を超え、新たな成長を遂げるための重要な鍵となっている。

例えば、Lincoln Cathedral には Lincoln Imp と呼ばれる小鬼の像が刻まれている。この像は正統的な宗教秩序から外れた異端的な生命力を象徴している。Lawrence はこのような逸脱した生命力に強い関心を寄せており、小鬼の描写は、単なる自然回帰ではなく正統的な宗教秩序に対抗し、身体性や物質性を肯定する新たな宗教的感覚であることを示している。Ursula の成長はこの異教的生命力と共鳴するものとして捉えられる。

Ursula は、帝国主義と Brangwen 家の血縁の共同体から解放されるために、土地との関係を身体的な交感として捉え直すようになる。Brangwen 家においては、土地は血縁によって媒介されるものだったが、Ursula にとっての土地は身体を通じた感覚的な交感を通してつながるものへと変化する。特に、Anton との子を宿し、流産するという体験は、Ursula にとって、帝国主義的構造からの逸脱であると同時に、Brangwen 家の女性たちが担わされてきた母としての役割からの解放という意味を持つ。身体は単に次の世代を生み出す道具ではなく、土地や生命と交感する感覚器官として再発見されるのである。

こうした身体的感覚と土地との交感を支える精神的基盤として Lawrence の異教的宗教性は機能している。それは、近代社会において抑圧されてきた身体性や土地への親密なつながりを回復するものであり、それは帝国主義的な支配構造とも、血縁の共同体の閉鎖性とも異なる、新たな個と共同体の関係を提示する。Ursula は、血の共同体や国家という全体性に回収されない個として、身体と土地と異教的宗教の新たな結びつきを通じて、自らの生を切り拓いていくのである。

結論

Lawrence の *The Rainbow* における Ursula の成長は、Brangwen 家に象徴される血縁の共同体の抑圧と、Anton Skrebensky を通じて示される帝国主義的枠組みという、二重の抑圧を乗り越える過程として描かれる。土地に根差した血の共同体から逃れようとする Ursula は、Anton との関係を通じて、新たな未来を模索する。しかし Anton が体現するのは、大英帝国という巨大な全体への従属であり、Ursula の成長を阻む別の構造に他ならなかった。

Ursula はこうした抑圧を乗り越え、土地・身体・宗教を新たに結び直す異教的宗教性に辿り着くが、ここには Jed Esty が論じる anthropological turn、すなわち近代文学が帝国の周縁文化や土着的な身体・宗教文化に目を向け、中心／周縁の関係を組み替えていく動きが色濃く表れている。Ursula の成長は近代的な自己確立というよりも、血縁共同体や帝国の全体性を超えて、身体と土地を介した異教的な感受性を獲得する過程として捉えることができる。Lincoln Cathedral に象徴されるゴシック建築は生命の循環を宿す身体的空間として Ursula に刻み込まれ、そこに血縁共同体でも帝国でもない、新たな個の可能性が示される。血や国家に回収されず、身体と土地を媒介に生命と交感する新たな生のあり方こそ、Ursula の成長が到達する地点なのである。

引用文献

- Alden, Patricia. *Social Mobility in the English Bildungsroman: Gissing, Hardy, Bennett, and Lawrence*. UMI. Research Press, 1979.
- Connell, Christine M. “Inheritance from the earth and generational passages in D.H. Lawrence’s *The Rainbow*.” *The D.H. Lawrence Review*, Vol. 36, No. 1, 2011, pp. 72-91.
- Esty, Jed. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England*. Princeton University Press, 2003.
- Iwai, Gaku. *D. H. Lawrence and Ambivalence in the Age of Modernity: Rereading Midland Novels and Wartime Writings in Social and Political Contexts*. Routledge, 2024.
- Lawrence, D. H. *The Letters of D. H. Lawrence: Volume II June 1913-October 1916*. Edited by George J. Zytaruk, James T. Boulton. Cambridge University Press, 1981.
- . *The Rainbow*. Edited by Mark Kinkead-Weekes, Cambridge University Press, 1989.
- Wright, T. R. *D. H. Lawrence and the Bible*. Cambridge University Press, 2000.